
糞のような理想のために。

鴉野 兄貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

糞のような理想のために。

【Nコード】

N0255BA

【作者名】

鴉野 兄貴

【あらすじ】

今度の仕事は「糞尿収集」。

この世界では珍しい上下水道完備の「車輪の王国」では便所はあまり珍しいものでもなく……。

変態技師の熱い理想はあまりにも気高く、そして臭いものだった。世界の平和のために『夢を追う者たち』は再び立ち上がる！

（前書き）

注意！！糞尿を表す言葉が80以上登場します。
今回の依頼人の変態度は極めて高いので注意願います。
そういうのがダメな人は絶対みないでください！！！！

うゝメシメシ!!

そういつて走り出す俺は何処にでもいる冒険者。

しいて違ふところをいうなれば、本当は女つて事くらいかな？

名前は……チーアって呼んでくれ。

腹が減つては仕事は出来ぬが、仕事がなければ腹は減つたままである。

そんなわけで、今日の狩りも不調に終わった俺は「車輪の王国」王都郊外の森の中にある冒険者の宿、

『五竜亭』に仕事を求めて入り込んだ。

「おい！アキ！！メシ食わせてくれ！！！！！！！！」

「最初から仕事する気ないでしょ？」

黒髪黒目、垂れ目に垂れ眉の女性、アキ・スカラーは片眉を吊り上げて微笑んだ。

心なしか、垂れ目に怒気を孕んでいる気もしないではない。

「だって仕事ねえし」俺はアキの用意したまかないを食べる。
なぜか今週は昼飯に限りアキのおごりになっている。

「うほっ！綺麗な水じゃないか！これもおごりかい??！」

上下水道が完備された「車輪の王国」では普通かも知れないがコレは嬉しい。

あつというまにまかないを食べだす俺。アキの薄給にしては実に豪勢な内容だ。

これも普段の俺の行いの成果であろつ。

「まあ馬鹿みたいに食べて」「成長期だからな！」

睨み付けるアキを無視して俺はメシにありつく。なんせ今週は昼飯だけはまともに食えるのだ。この至福は変えがたい。

「でも、いいの？ホイホイ食べちゃって」アキは意味ありげに微笑んだ。

ネズミとゴキブリと浮浪者の子供が走り回る他店舗と違い、

『五竜亭』は厨房はもとより食堂部分も掃除が行き届いている。

加えて、木の繊維が腕にちくちくする安物のテーブルはこの店にはない。

さらに、女将のアーリィさんの料理の腕は宮廷料理人並みと評判なのだ。

金持ち連中の残飯を再調理したあまりもののまかないといっても侮れない味である。

「そーいえば今日は格別に美味しい！」俺が喜びの声を上げるのを見て、

「そーじゃない」アキは額を押さえてため息をついた。

「……だ。そーです。トートさん」アキはそういつとため息をついた。

「素晴らしい！素晴らしいよ！スカラー君！」

嫌な予感がした。俺はそっち側を振り向かないように気を配り、即座に店を出ようとした。

が、全てが遅かったのだ。

「人糞、家畜の糞から食材を！尿や汚水から飲料水を！！

栄養、味、消化のよさ、値段の安さ。全てよし！我が研究の成果が

実ったのだ！」

俺はテーブルに突っ伏し、ドワーフ達が丁寧に鯨の皮で磨いたテーブルを盛大に汚した。

……。

「ごめんなさい」アキは楽しそうに笑った。絶対反省していない。ちなみに、トートと言う中年一歩手前の青年は簀巻きにして放り出した。

男だったら張り倒している所だが、流石に女のアキは殴れない。

「『燃える水』から作った肉、食べられない海草から作った肉もどき、

馬の小便から作った水、糞だけを食べさせて育てた豚の肉……」

確かにカチカチになって水で溶かした不味いビールを「馬の小便」って言うが。

「ゲロから作ったシチューもあるわよ？」死ね。

俺がにらみつけるとアキは楽しそうに「冗談よ」と笑った。

「まだ美味しくないんだって」

俺はため息をつく、「慈愛の女神様お許してください」と呟いた。

薄暗い店内に気がついた俺は窓を開ける。春先の冷たい風がちよつと辛い。

「ぶった〜。チーアがぶった〜。傷物にされちゃった〜お嫁にいけない〜」

店の奥ではたんこぶを抑えたアキがばやいている。知るか。

森の香りが心地よい。天気も良い。

ふと視界に入った簀巻きが喋った。「寒いので入れてください」

「コレ、凄いぞ」ロー・アースはそういうと遠慮なくその水を飲んだ。

「精霊使いの浄水の魔法をほぼ再現している」

全ての不純物を取り除いて純水を作る「浄水」と違い、水としての味も優れているとロー・アースは言う。

……今日からお前、馬の小便飲む男な。俺は悪態をついた。

「このお肉、美味しくないけど、不味くはないよ？」

謎の肉の試食をする幼児の姿をしている妖精は俺の相棒、ファルコ・ミスリル。

燃える水から作ったという肉で作ったステーキはミンチを練って作った肉に似ていて、

酷い味というほどではない。むしろ残飯よりよっぽど美味い。

「研究の副産物で出来てしまいましたが、将来的には人糞から作れるようにしたいですねえ！」

そういつて笑うトートという研究者に、俺は無言で顔面にパンチを入れた。

「他にも色々あるんです！大岩をも砕く炎の魔法を再現する薬とか！高地に住まう蛮族が使う糞から作った高性能な燃料とか、

糞から作った作物を元気にする薬とか、尿から作った食用塩とか、人糞や家畜の糞を水に溶かして日光を当てて育てた藻を処理した豆もどきとか」

……正義神殿の異端審問官に捕まってしまえ。どう考えても危険人物じゃないかつ！

「そうそう！今一番頑張っているのが糞尿から砂糖を作る研究なんです！」

「それは流石に」アキがばやいた。「ドン引きだろ」ローが呆れる。甘味っていうのは滋養剤としても、調味料としてもかなり貴重だが、安価に作れたら凄いだろうなとは思わんでもない。でも原材料が糞尿だといわれたら……さすがにパスだ。

「……さとうだいこんとか、メープルシュガーとか、蜂蜜でいいんじゃないの？」

流石のファルコも現実的なツツコミを入れるが。

「高いじゃないですか。うんちならタダなんですよ？」
いや、まてまて。なんかおかしいだろ。

参考までにと魔法や実験で使う触媒代金をロー・アースが聞く。

ロー・アースは首を振って手をひらひらさせた。

「綺麗な水と甘ゴケが必要だってさ」甘ゴケというのはエルフが好むコケだ。

甘味と旨み、豊富な栄養を持ち、光源としても使え、水源を浄化できる。

当然、魔法の触媒として砂糖など比べ物にならないほど高値で取引されている。……ダメじゃん！！

「と、いうわけで、糞尿がもつともつと必要なんです。お金はいくらでも出します」

キラキラする瞳でトートは俺達を見ている。嫌な予感。

俺は逃げ出そうとしたが、即座にトートに腕を？まれた。

「やらないか」

「ウホッ！いい仕事！」そういつて当事者でもない上、店主でもなく、

更に俺が了承してないのに勝手に冒険者紹介手数料を徴収するアキ。

嫌だと叫んで暴れる俺をローとファルコが抑える。

こうして、俺達は便所掃除人として働くこととなった。
全て貧乏が悪いのだ。たぶん。

「今日みたいに天気が良いと最高なんですわ」

トート氏の解説は本当に長い。なんでも糞から食料や肥料、はては砂糖を生産する場合、

太陽の光と綺麗な水、ある程度の気温、ある種の藻（酷いときは甘ゴケ）が必要らしい。

「そのまま食べるとおなかこわしますからねえ」……食ったのか。
もうなにも言うまい。

「再現もしてみましたけど、天然の味とか触感はありませんよネエ」
俺は吐き気に耐えかねていたが、この男、俺のゲロでも喜んで手にいれようとするので根性で耐えた。

便所掃除といってもこの国には汲み取り式の便所はないので、個人宅を回って集められない。

そういうことで車輪の王国地下に広がる王都の上下水道への立ち入り許可を役人に求めたのだが、

毒でも撒かれたら一大事と当然のように断られた。

また、「大量の糞尿を必要とする」と届出に素直に書いたトートは危うく正義神の神殿に発狂者として通報されるところだった。

「車輪の王都はまだ温暖なほうですが、太陽が照っていてポカポカでないで発酵してくれないんです」

それ以前に俺が発狂する。

冬場どころか、太陽が照っている日と言うのは貴重だ。

庶民も貴族も太陽が照っている日というのは仕事はほぼ休みにする

ものである。

そんな日に、何故糞尿取りなぞ行かねばならんのだ。

あんなのは糞壺にためこんで窓から捨てれば終わりだろうに。

「肥料って???」放浪癖がなければ大神官な筈の兄貴に聞いたこともあるようなないような。

「大地の力は作物を続けて育てるとどんどんなくなるってご存知ですか? 森を焼いた後に畑を作ると良く育つともいいますね」

聞いたことがあるが、その焼畑って奴はエルフを激怒させるので、あまりやられない手法だ。

てくてくと俺達4人はスラムのほうへ歩いていく。

この国で行政で下水道進入許可を得ることが出来ない状態で大量の糞尿を手に入れたければ、

魔導帝国時代の遺産である上下水道を使っていない不法建築が多い地域に行くしかない。

つまり、スラムである。

「大いなる森の力を燃やしまつて、わずかな大地の力にしてしまっわけです。

ただし、其の後の酷さはご存知でしょうが」トートはため息をつく。

いくら育ちが良いとはいえ、開墾の手間は半端ではなく、エルフを激怒させる代償に、

ほんのわずかの間しか役に立たない畑を作るのは割に合わないのではないかと。

「ですが、お日様の光とある種の藻を育てた糞尿は、うまい具合に発酵させると」

キラキラする瞳でトートは言う。

「なんと！大地の力を回復させる薬になるのです！それを肥料とい
います！」

……胡散臭い……。うんこ食うとおなか壊すって今いったぞ？

「おなかは壊しますが、
藻が発酵と一緒に糞尿の毒素……というか、病気の元？を消してく
れるのです」んなアホな。

「うーん？？？」毒だか病気の元だか知らんが、違いがイマイチ。
俺も兄貴から医者の手ほどきは受けたのだが、
どうもトートは魔道士や学者だけではなく、医者としても一流らし
い。

「この国、スラムはこまめに焼けて無茶苦茶なことするけど、関
係ある？」

ファルコが口を挟む。伝染病を防ぐためとお上は言うが、誰も信じ
ていない。

「あります！鋭いですね！！！！スラムでは糞尿を処理せず、窓か
ら捨てますよね！？

その糞尿は雨で流れて終わりじゃないんです！

実は細くなつて残っているんです！それが回りまわって飲料水に
入ってしまい、

病気の元が身体に入ることによって伝染病になると私は考えています！！
！」

「……珍説すぎる」「俺達は呆れた。伝染病の原因はいまだわか
っていないのだ。

確かに、この国ではスラム以外から伝染病が発生することもないし、
区画整理と言う名前の破壊活動を行った年は病気が流行らないこと

は知っているが、

よその国では効果がなく、単に愚策として知られている。

トートが言うには「上下水道のない他国では当然の結果」だそうだ。

「雑草と生煮えの食い物は食うな。生活習慣を改善する。水は必ず布で越して沸かせ。

必要以上に湿気のあるところに住むな。服と身体と部屋は清潔にしろ。

糞壺はこまめに指定の場所に捨てに行け。

それらを怠って病気になった。魔法で治せという患者がきたら蹴れ」と兄貴も言ってたが。

「チーア！！！！」ロー・アースの叫び声。

「ごめんよ！」とあとから声が聴こえてくる。勿論上から。

「水霊よ。我らを護りたまえ」間一髪。

「浄水」の術の応用だが、あらゆる毒や炎から身を護る薄い水の膜を作り出す術だ。

結果的に、俺達4人に降りかかった汚物は綺麗な水に化けた。だがソレが良くない。

「妖精だ」「よそ者共だ」遠くからヒソヒソ声がする。

ボロボロの廃屋の窓は全て締め切られ、

近くを通る男達は危ない視線を投げかけ、ポケットの中から手を離さない。

あちこちからクロスボウで狙っている気配がする。知らないうちにスラムに入り込んでいたらしい。

彼らは区画整理などを行う役人やよそ者を嫌っている。

「あゝ」汚物を当てられそうになったトートは「残念です」と呟い

た。

「あのう。うんちやおしっこを人にぶつけるほどあるのなら譲って欲しいのですが」できればたくさん。

ポケットにナイフを潜ませていた男達は石の様に固まっていた。

……。

「変な医者だよなあ。トート先生は」ごろつき風（というか、ごろつきそのもの）のごつい人々や目つきの悪い女共が笑う。

俺はトート「先生」の医術活動につき合わされ満身創痍状態だ。

図らずしも精霊の使い手で癒し手だとバレてしまったので、さつきから回復魔法や精霊の加護、

医者 of 真似事、料理の手伝いときき使われた。

ファルコはあつさり場になじんでいる。傍目は幼児にしか見えないので当たり前なのだが。

ロー・アースは薬の調合の手伝いだ。もともと魔道士、お手の物だ。

「うんこなら糞壺にたっぷりあるから、好きに持っていてくれよ！？」

「では、道路にある分も頂いて宜しいですよね???」キラキラした目で喜ぶトート先生。

「そりゃ、金はいらん。ウンコくれってお医者様、今までいませんでしたから!!!」大笑いする住民達。

「では、遠慮なく頂いていきます!!!」スコップを手に飛び出さんとするトート先生を俺は止めた。

「あの、仕事には道を覆うウンコの塊というか床というか……。それの掃除も含まれているんですか?」

「当然です」トート先生はにこやかに微笑まれた。正直、俺は泣き
たくなった。

トート先生はスラムの住民の医療活動に終始せざるを得なくなつて
いたので、

俺達と住民有志（ウンコを買ってくれという酔狂ものがいるのだ
から仕方ない）が必死で道路の床と化しているウンコを除去する作
業を行う。

「おい！投げるぞ〜！」「なげんな〜〜！！あとで集めるの
が大変だ〜！！」

「ふざけるな。下まで降りるのが面倒なんだぞ！」「投げたら分け
前やらねえ！！！」

……たしかに、糞壺を指定の場所に持つていく人間と言うのは何処
の国でも稀だが。

「ある種のカビですね。目を洗淨しました。これで見えるようにな
りますよ」

トート先生はにこやかに微笑む。喜ぶ老人。変態だが、結構エライ
人かもしれない。

「やつぱり水ですねえ」とトート先生は言う。

先ほどの目の病気の原因は水に含まれる見えないカビの所為とのこ
と。初耳である。

汚い水のある国では病気の元を駆逐できないらしい。

「糞壺の改良が必要です」とトート先生。はあ。と俺は呟いた。
適当に出すだけでしたら窓に捨てるだけのものをどう改良しろと？

まあ、車輪の王国では古代の下水道を利用できるので、糞壺のない

家庭も珍しくはない。

行政の指導どおり建築して便器に糞尿を排泄し、水周りで利用した生活排水を下水に接続する。

そうすれば汚物は勝手に古代の下水道が処理してくれる仕組みである。

この関係で汚物を収集するためにワザワザスラムに出向くことになった。

この下水と上水完全分離システムは慣れるとよその国にいけなくなる。

「そうですね」トート先生はにっこり笑った。

「チーアさん……」「はい？」

「脱いでください」はいっ???

な、なんだ??それ?いきなり脱がせようと襲ってきた男とか女は限りなくいたが??!!

ハアハアと興奮した息遣いがトートから漏れる。

「そして私の前で排泄してください。できれば大小」その頬は紅潮し、瞳は潤んでいる。

「先生」俺は微笑んだ。

「どうして頬を叩くのですか」トートは涙を流して不満の顔をする。
……。

「なんかあったの?」「ふあああ。どうした?」ファルコとローと住民達が戻ってくる。

「別に何も変なことは言っていないません。排泄してくれと言っただけです」「……」

住民や温厚なファルコはもとより、流石のロー・アースもドン引き

している。

「男性なら他人、可能なら美形の異性、女性的な容貌の少年の排泄を見るのは興奮するでしょう？」

「しません」「しない」「するとしても流石にそれは公言すべきでは」

本当に、本当に正義神殿の異端審問官が狩りにくるぞっ??!!

ふう。とトートはため息をついた。

「つまり、生物にとって欠く事のない営みである排泄は、実に軽く見られているか、汚いもので、ないものであつてほしいと思われているのです」

慈愛神殿では自衛以外の暴力は禁止されているが、流石に排泄を異性に強要するのはどうだろう。

まあ、トート先生は俺の性別に気がついていないと思うが……。ちなみに、他国でのうちの神殿は汚物の掃除や残飯の回収も引き受けている。

しかし、寒冷な土地では「肥料」とやらは作れないと思われる。

「かくなるうへは古代の排便そのものを楽しんだという文化を復活させるしかありません！

それも早急に！世界に広めなければ世界は滅びてしまうでしょう！

「……」

「……」

変人だが、真面目で気さくな性格と確かな医療技術、しかも金を不要とする態度。

一週間足らずでスラムの住民の心を掴んだトート先生だが、流石にドン引きである。

「なんとという糞の理想」と、ローアース。

「なぜそこで世界滅亡なんですか……」スラムの住民達もドン引きしている。

世界制服だの滅亡だのは古代魔導帝国が滅びた今は頭のおかしくなつた魔道士くらいしか口にしない妄想だ。

「とーとおっちゃん。世界が滅びるって？」ファルコがいつもの調子を取り戻す。

単純に、ドン引きしすぎて思考能力が低下しているだけかも。俺もそうだし。

チーアさん。皆さん。こちらに。そういつてトートは俺達を自室となつた廃屋に案内する。

（住民が診療所として急遽建設してくれた廃屋なので比較的新しい）
強烈な糞尿を煮たり焼いたり溶かしたりする匂いに頭がおかしくなりそうだが、必要なことらしい。

「見てください」俺達は小さな壺に魅入る。

「ガラスだ」ガラスはドワーフが作る宝石の一種で、壊れやすいが硬くて腐食にも強く、任意の形を取らせることができる。

「先生、ガラスなんてよそ者がもってたら盗っちゃいますよ？」盗賊風の住人が苦笑する。

「ガラスなんて大した品ではありません。所詮砂ですから」はい？
??砂???

「砂??？」「ガラスが砂??？」「所詮砂??？」

「結構簡単に作れますよ？」先生は苦笑するが全員呆然としている。
この先生、ドワーフの秘法をなんだと思っているんだ???!!

「でも、本質はそこではないのです」先生はにこやかに話す。

「皆さん。このガラスの壺の中には命の循環と世界平和への結論があるのです」

……えっと、正義神殿に連絡したほうがいいのかなあ……。

……。

「質問です。このガラスの壺の中のお魚さんは何を食べているのでしょうか？」

「エサ」俺達は即答した。

「このお魚さんはフナの種類なんです」トート先生はにこやかに笑う。

「10日以上、私はお魚さんにエサをあげていません。何をお魚さんは食べていると思いますか？」

……フナってなんか食うのだろうか？釣りのエサには絶対かからないのは知っているが。

「フナはなにも食わなくても生きていけるんじゃないのでしょうか？」老人が問う。

「違います。毎日この器を洗えばたちまち弱っていきます」

「水飲んでいるのか？」「水だけでは生きていきませんね」

頭を抱えてあーだこーだ議論する俺達に「正解は藻です」とトート先生は言う。

「お魚さんのうちと太陽の光と水で藻が育ち、それを食べてお魚さんが生きています」

マジか???!!!というか、フナが食べ物を食べるって初耳だ!!!

「ウソだと疑うならパンくずを上げてください。食べますよ？」

そういつて、トート先生はパンくずを壺に投げた。フナはパクツと

「藻に良く似ているので間違えて食べるようです。ちなみに練り固めれば釣り餌になります」

釣り人たちが必死で探し求めている「幻のエサ」がパン????!!!!

「お、おう!!! 頑張ってくる!!!」 「お、俺も釣りに行つてい
いますかトート先生!!!??」

誰も逃げませんからちよつと待ってくださいとトート先生は笑つて返す。

飼うことが可能です。とトート先生は言う。

「それって、大きく育ちます??」「今は研究だけです、頑張れば家畜になるのではないでしょうか?」

凄すぎるぞこの先生。家中ウンコまみれなのはさておき。

「これは人糞についた藻を水とお日様の光で育てて食料に加工した
ものです」

18

「これだけで1年以上人間は生き延びれます！」ちゃんと食べて実験しました。とトート先生。

「……」緑の豆っぽい食い物は俺達だけではなくスラムの皆も喜んで食べていた。

「先生…そういうのは早く言って下さい」

「……いや、その、ウンコで薬を作るって言う時点で怪しいとは思いましたが」

「酒のツマミに結構いけると皆で食っちゃったよ……」

「いいことではないですか。嫌がる豚さんを食べなくてもいいんですよ？」

ちなみに豚は人になつく。賢くて絞めるのが悲しいくらいだ。

「その豚さんって」「ウンコで育てました」「先生……」

「いいですか？森を焼くと10年も持たない畑が出来る代わりに、100年単位でエルフの怒りを買い、森の再生も同じくらいの時を必要とします。

しかし、肥料を使えば、一年間に一回同じ畑を使えるのです」
「ウソだろっ！！！」

「休耕地にお花の一種を植えて豚さんを飼えば更に食料生産の効率を上げれます」

「流石にそれは大嘘では??」

「いえ、理論上一年に2回以上育ちますよ?」「マジですか…」

「実験しましたから。もっとも素人の私では別の理由で枯らしてしまいましたけど」

「皆さんは戦乱や飢餓、水不足、水を飲んでおなかを壊すなどの理由で

身内を亡くされたことはないのですか」

「「あるにきまつてんだろ」「そんな人間はこの世にはいない。全員口をそろえた。」

「この藻が育てばそれがなくなる世界になります」「……」
俺達は絶句した。なんという偉大な男だ。この男は。

そうやって見とれていると彼はいきなり、衆人環視の中、ズボンを脱ぎだした。

「ああ。シヨンベンです」そういつてコップみたいな器具に小便を注ぐ。

器具から出てきた水をカップに入れて、飲む。

「綺麗で、飲む水になりました」……マジで??

ロー・アースが「飲まなければ良かった」と苦笑いしている。いまさら何を。

見てみると確かに水の精霊の力を感じる。本当かよ。

「すげえ！俺らの飲んでる水より綺麗だぞ?」「上水道の水を汲みに行かないとこれはのめないぞ!？」

皆が大喜びしている。試しに普段飲んでいる水をこのカップに突っ込むと貴族が飲むような綺麗な水に化けた!

「こ、これって工房の汚染水や鉍毒にも効果がありますか??」

よくわからんが、鉍山を下手に掘ると呪いが大地に降りかかるといわれている。

一部では毒の一種といわれ、「鉍毒」といわれている。

「まだ実験中ですがいずれは」

「すげえ!!魔法だ!」「魔法ではありません!英知の力です!!」

そして、英知、勉強は誰にでも出来るのです!!と、トート先生。

「トート先生!俺も勉強が出来るんですか?文字だって読めませんが」

「喜んでお教えしますよ?」「おおおおおおお!!!!」「

問題は。とトート先生が言う。

「食料がないから戦争をする。戦争がなくなれば傭兵が野党としてあぶれる。

野党は食料を生産しませんので農村を襲う。農村が滅びれば余計食料がなくなるのです」

……ダメじゃん。

「ですから、野党の皆さんが野党を辞めなくなるほどごはんがあればよいのです」

兵士や冒険者を雇うより平和的でしょう?とトート先生。

「そのためには、もっとももっとうちの研究を極めねばなりません」

トート先生は微笑む。

「行政の許可が下りないならば、下水道にはいつてうちを盗みましよう」

俺は逃げようとしたが、トート先生にがっちり腕を捕まれてしまった。

「世界の平和のために、戦いましょう!!!!!!」

……。

……まさか、下水道に侵入することになるとは。

俺達は鼻をしかめた。一応、側面には歩くための歩道があるが、国家の宝である上下水道に勝手に入り込むことは大罪である。

加えて、古代の魔導帝国の遺跡である下水道や上水道には、いったいどんな魔物や罠が待っているかワカラン。

道中、よくわからないアメーバーもどき、不思議な虫みたいな生き物に襲われたが、

トート先生曰く（ついてきた！）「水を綺麗にしてくれる生物」らしい。

「しかし、なんでこんな遺跡に」俺らは愚痴る。

嚴重に封印されているはずなのに下水道に住み着いた浮浪者達に遭遇するが、

トート先生が食料をホイホイ与えるので逆に待ち伏せされて襲われ、眠りの魔法を使う羽目になったり意外と大変だ。

「あの人たちって太陽みたことないのかなぁ」ファルコが呟く。

……どうなんだろうな。

ところでなんで下水道にワニがいるのか、そっちのほうに専念して欲しい。

ちなみに、ワニっていうのは熱帯に住まう凶悪な獣だ。

下水の中から待ち伏せ、いきなり人間をさらって食ってしまうのだが、

待ち伏せに気がついたので撃退は比較的容易だった。

「年間通して暖かいので熱帯の生き物も生き残りやすいのでしょうね」

トート先生はたのしそうに解説している。道楽者が取り寄せて捨てたのが育ったのだろうとの事。

その道楽者は刑罰を受けるべきだ。うん。

「うんちを盗むなら別段奥を目指す必要はないのでは？」俺はぼやく。

一張羅が台無しである。帰ったら浄水の魔法が必要だ。

ロー・アースはいやそうに肩を落として歩いている。いや、彼でなくとも俺だって嫌だ。

「探検 探検」 ぼくのまち」 場違いな明るい声が反響する。ファルコである。

彼の嗅覚は犬並みの筈だが「気にしないようにしたらだいじょぶ!」だそうだ。

どういう神経だと問い詰めたいが、「ネズミさんだって臭いって思っ
てない」と返ってきた。

それは。トート先生は解説する。「うんちを処理する魔法の機械か何かがあるはずなんです」
原理を説明すれば、他国でも上下水道がつかえます。と楽しそうに言う。

……原理を説明するどころか、すっかり壊して縛り首になりそうな予感がする。

「霧雨?」^{キリサメ}「かもしれませんね!!!」

魔剣、キリサメは刀身に霧のような結露を常に宿し、常に水を生成するのみならず、

刀身に触れた毒素や邪気や汚物を完全に綺麗な水にしてしまう力を持つ伝説の剣である。

あまりにも素晴らしい力を持つため、魔導帝国時代に同じような力を持つコピー品が大量に作られたとある。

「いや、今の魔法でキリサメの再現はコピーでも無理だろう」ロー・アースは言う。

それじゃ、最低でもコピーの剣がないなら下水道の実現は不可能じゃないか。

トート先生曰く、「海や川の精霊さんもある程度は浄化してくれま

すが、大都市の汚物は無理です」らしい。
俺達慈愛の女神の使途が回復魔法を使いすぎると倒れるのと同じらしい。

「ねね。かなりおくまできたよ！」ファルコが言う。

正直迷路と変わらない。戻ってこれるか極めて疑問だが、

「アリアドネの糸玉」という魔法の糸玉をトート先生が持っていた。これを使うと即座に入り口に帰還できるらしい。貴重な品だが使い捨てである。

うん……？「どうした？」ロー・アースが不思議そうに問う。

「今、物陰にグラスランナーがいたような」浮浪者の子供にも見えなかったし。

「……！！ファルコ！チーア！！先生！！逃げろ！！」

突如走り出したロー・アースを追って俺達も走る。が。

「な、なんだこれは！！」俺の身体にまとわりつく粘つく糸。

「ぐるぐるぐるぐるぐるまきまき」

「クソッ！遅かった！」

「巨大蜘蛛でしょうか？楽しいですね」楽しくない！！食われるんだぞ？！

完全に動きを捉えられ、水溜りならぬ糞溜まりの中でもがく俺らを小さな黒い影が取り囲んでいた。

……。

俺達を捕らえた小人達はグラスランナーに似ているが、黒い肌に邪悪な笑み、触手を思わせる異常に長い指を持つ生き物だった。

「砂糖や塩も沢山持つてて、嬉しいってさ」……おい。その砂糖は。

「!!!!!!」

「!!!!!!」(^^)(^^)「……」

??

開放された俺達は、無事、地上に帰ることが出来た。

砂糖や塩を糞尿から精製する技術を得た小人達は態度を一変。
上機嫌で古代の浄水設備の解説をしてくれた。

帰りに握手を求められたが、正直どうよ？これって!!!!??

「さて、頑張つて作りますよ!!!!」トート先生は使命に燃えているのでどうしようもない。

数週間後、「自信の糞壺」がスラムに出来た。

誰でも使えるように工夫をした結果、スラムのみんなに使ってもらえるよう無料で公開された。

俺はトート先生にはわからない「ある機能」の追加を提案した。

元になった古代遺跡の便所にはあった機能である。古代人の知恵は偉大だ。

「ええと」トート先生は楽しそうに言う。

「おしっこやうんちを飛ばして的確を狙うとか、絵を描くとか、排泄の速度を競うとかいうゲームは今回発見できませんでした」

残念ですとトート先生は言うが、そんなものの再現できるはずはない。既にトート先生の性格を知っているスラムの皆は大笑いしている。

「でも、糞壺を窓から捨てる手間に変わるくらい、楽しい糞壺は作れました」

将来的には携帯可能を目指します！とトート先生は意気込む。

よーわからんが、綺麗にした「水」を噴水の原理でもって噴射、尻を洗うのみならず、掃除を勝手にやってくれ、ついでに下水に流してくれる画期的な代物らしい。

……使用法を解説してもらい、「便座」と言う椅子に座る。

壺と違って、中腰にならなくて良い。楽だ。俺はズボンを脱ごうとして。

下からのぞくトート先生の顔に気がつき、踏んだ。

ちゃんと下水に流せるか試験するためと解説されたが、やっぱり、変態だった。

……。

なんというか、その……すごく……快適というか、スツキリと言うか、身が清められたというか…。

古代人の知恵に感動しつつ、俺は個室から出た。

隙間から覗こうとした男女はローの眠りの魔法で退治されていた。グッジョブだ。ロー・アース。

次々と男女が試しにはいつてみては出て行くが、中には気持ちよすぎで出てこない困り者も続出した。

特に女性の評判は物凄くよかった。男にはわからない世界であろう。

「私の仮説が正しければ、これが普及すれば伝染病は激減します！
！！！」

「……おおおおおおおお！！！！」「……凄い！凄いぞ！先生！！！！」

「でも、道路に糞壺を投げたら元通りですから、それだけ気をつけてくださいね！」

「……面倒くせえ！！！！」

大笑いする住民達。にこやかに微笑むトート先生。

「皆さん。ロー・アースさん、チーアさん。ファルコさん。助けてくれて本当に有難うございます。」

……これで、伝染病や食糧難や食中毒で死んだ方々も浮かばれると思われれます。

私はもつともつと研究して、もつともつと効率よく、沢山うんちを食料に出来る社会を目指します。

そうすれば、世界中が都市になっても元気に生きていけるはずですよ。壮すぎる理想だが、彼ならやり遂げるかもしれない。世が世なら大天才といわれただろう。

「「本当に、本当に有難うございます」」トート先生は頭を下げた。このまま、スラムでウンコの研究をしながら暮らすそうだ。

「前より臭くなっちゃったが、トート先生ならしかたないわな!」盗賊風のアンちゃんが笑う。

「あの豆、品切れらしいから、沢山作れるようにしてもらわないとな!」……気に入ったのか。ご愁傷様。

「願いを叶えてくれる冒険者。スカラー君の言うことは本当でしたね」トートが笑う。

……ほうほう。そういうふざけた噂を流しているのはアキだったか。あとでまかないに例の緑の豆を入れておこう。

「ありがとうございます。最後に、皆さんのお名前をもう一度教えてくれませんか」

「「「ただの、『夢を追う者たち』です」」俺達三名は名乗った。

「「「「近寄るだけで疫病神が憑くという噂のっ!!!」」」」「「余計なこと言うなっ!」」

スラム街の皆に俺達は笑いながら叫び返した。大笑い。

「じゃ、俺達はこれで」俺は笑って手を振る。ローが背をむけてひ

らひらと手をふった。

「まゝたゝねゝゝゝ！」「ファルコが楽しそうに踊って手を振り続ける。

口笛を吹いて呼び出した愛馬、シンバットは俺達を見ると嫌そうに首を振った。

エピソード。

数週間後、お上に呼び出された俺たちは豪華な部屋の中にいた。ものすつごく、ものすつごく居心地がわるい。

久しぶりに会うトートは前より酷い匂いを放っていた。女官達があらさまに顔をしかめている。

当然のように俺達は「浄水」の魔法を何度もかけられ、所持品に消臭や浄化や補修の魔術を施された。

おかげで、武器や防具の補修代金が大幅に軽減された。助かった。

ふと、俺達の隣に気さくそうな爺さんが座った。

「ファルちゃん。ひさしぶり」「ひさしぶりなのなの！」

どうもファルコの知り合いらしい。

豪華な服を身にまとっているから貴族かもしれないが、どういふコネなんだろうか。

なぜかロー・アースが席から立ち上がり、膝を突いている。

……なんのギャグをやっているんだろうか？

「あれは凄いね」「おといれ？」「そうそう。妻も娘も感激してたぞ」「おー！」

貴族様も似たものを作って実用化しているそうだが、暇な話である。

他国なら糞壺から窓に放り出せば終わりの話を、噴水の技術を応用し尻を洗った上でその水の流れを利用して糞壺表

面を洗淨、

その水の力で古代の下水処理施設にそのまま廃棄して、廃棄の手間を省けるという、

画期的な糞壺の再現は、ちょっとした名物になり、早くもあちこちで普及しはじめているそうだ。

豚と肥料育て（太陽の光が足りないので光の魔法で代用できないか試験中）、

伝染病との関連性についての仮説も検証されているが、皆本気にしていない。

成果が出、実用にいたるまでは相当な時間がかかるだろう。

君がチーア君かね。と老人は笑う。「そーだぞ。爺さん」俺は言葉を返す。

「ドライアド君に似ているな」……母さんの知り合い???

ふふふ。と老人は笑って席を立った。「また会おう」

まったねー！と手を振るファルコをみながら、変な爺さんに絡まれたなあと思う俺だった。

役人どもに呼び出され、無理やり膝について話を聞かされる俺達。ファルコにいたっては正座して聞いている。

「技師トート、及び『夢を追う者達』に称号を授ける」

「辞退します」俺達三人はあっさりと答えた。

トートは喜んで受けたようだ。頑張って欲しい。

「他国なら糞壺から窓に放り出せば終わ리と思われていた…壺を。噴水の技術を応用し……洗った上でその水の流れを利用して…壺表面を洗淨、

その水の力で古代の処理施設にそのまま廃棄して、廃棄の手間を省

く。

偉大な魔導帝国の遺産の再現に貢献し、都市の衛生面大幅に向上、伝染病の予防、浄水技術、食料増産に貢献した功績を認め、技師トート、及び『夢を追う者達』に称号を授ける」

「だから辞退します！！」俺達三人は必死で叫んだ。

「いらんのか？謙虚だな？」につこり笑う「国王陛下」はあの楽しそうな笑みを浮かべていた。

そして、俺達はしばらくの間『糞を追う者たち』のあだ名で呼ばれることになった。最悪である。

もし、郊外の森の中の小さな冒険者の店を訪れる事があつたら、迷うことなく俺達を指名して欲しい。きっと、願いは叶うから。

ただし、『余計なおマケ』については自己責任で！

(F i n)

（後書き）

「宇宙船サジタリウス」のように一般的な冒険者が庶民とともに困難に接して、

仮面ライダーブラックの初期路線のように敵味方が握手して和解して終了する。

冒険の題材は全てファンタジー世界の日常生活に基づく。

……はい。基本ラインからは語るのを避けることが出来ないウンコの話です。

他にも浄水関係のお仕事をしている親友から興味深い話をいくつも聞いているのですが、

この世界の人間の知識にそぐわないのでパスしました。

なお、トート先生のモデルは特に存在しませんが、名前はTotto社様から取らせていただきました。Totto社様御免なさい。

もしかしたら加筆するかもしれませんが、とりあえずここまでとします。

……内容が酷すぎて削除されそうな異色作品になりましたが、作者は大真面目に書いています。

この拙い物語を排泄を通して人類の食料危機回避に尽力された偉大なるわが国の研究者、故中村浩博士様に捧げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0255ba/>

糞のような理想のために。

2011年12月31日16時51分発行